

東アジア漢文文化圏のことば

萩原 義雄

はじめに

「中華」ということばを今でも日本国中で目にする。その殆どが「中華料理店」の看板か中国の書を専門に取り扱っている店の名前として目にしていることであろう。この「中華」とは、『日本国語大辞典』第二版には、「①「華」は文化が進んでいるの義）世界の中央にあって最も文化の進んでいる国の意。特に、黄河流域に古代文明を築いた漢民族が周辺諸民族を東夷・西戎・南蛮・北狄と呼ぶのに対して、自らを世界の中央にあって最も開化している民族であると自負していった語。また、その居住する地域。中国。中夏。②「ちゅうかりよりり（中華料理）」「ちゅうかさば（中華蕎麦）」などの略。③「ちゅうかまんじゅう（中華饅頭）」の略。」とあって、①の意味「大きなはなの真ん中」即ち中央を意味していることばである。ここを中心にして、東アジアの言語文化が蠢いているからだ。この地域では漢学・漢字を修得してきた結果、自国語とは異なる言語文化（中国漢字）を受け入れ、これを見事に変容させてきたのである。大陸・半島・孤島という地形的な違いは、これらの言語文化を見事に変容させるに相応しいものであったことを物語っている。事実、東の果てに位置する古代日本列



島に書物や知識、あるいは人が流入してきただけではなく、原語である倭語及び日本の諸言語と融合し、新たな言語としての日本語（和語）を生み続け、日本国（和国）を生み、日本人（和人）を生むに至ったといえよう。

「倭國」とは、離合文字にすると「千八人の女」と書く。この國がどのような言語を持ち得ていたのかは、まったく霧に閉ざされ、垣間見ることすらむづかしいのも事実である。

古代日本の国を象徴する和歌集『万葉集』を見ると、ここに母音が八母音あって、現代の日本語の母音数五つとは異なることを知り得たのも近代日本語学の成果であった。この母音の異なりですら、実際の発話のなかできしつと理解するまでにはなかなか至らないのも歯がゆいところでもある。

現に、「聞きなし」ということを考えたとき、雀の鳴き声が「ちゅんちゅん」か「じゅうじゅう」か、現代の日本人と古代の日本人とは、その「聞きなし」に異なりがあることもよく知られているからだ。また、この「聞きなし」では、地域差もある。今蟬の鳴き声「つくつく法師」の鳴き声を関西の人は「オーシイツクツク、オーシイツクツク」と表記する。これを関東の人は「ツクツクホウシ、ツクツクホウシ」と表記するのはよく知られた聞きなしの語である。

なぜ、同じ日本という国に生きて、同じ先祖から子々孫々受け継いできたにも関わらず、同じ母国語の言語感覚なのにこのように異なってきたのであろうか……。文字の習得とその方法も同じようなことが考えられるのであろうか。こうした疑問をこの時間を通じて繙いていきたい。

文字との出会い

大陸の漢語・漢字は、朝鮮半島で「カタカナ」の母系を生み出し、さらに、海島「日本」において、女子どもでも読み書きができる「ひらがな」を生み出した。楷書が正式の公的な文字であれば、行書そして、草書は、世俗の私的の文字ともいえよう。「万葉仮名」という文体を今日の私たちが初めて目にしたとき、その文字体系の源をすぐに理會することができないのも事実であろう。「止」と「と」、「乃」と「の」、「流」と「る」、「与」と「よ」、「己」と「こ」、「惠」と「ゑ」、「序」と「そ」、「久」と「く」、「日」と「ひ」、「之」と「し」がそれである。

これらの草書体で表記された文字を目にした側は、元の文字を理會できずに書寫し続けてきた原日本人だったのやも知れない。現代の私たちが中世の日本人が書寫した文字を目にして転写するとき、原字「世」を変体仮名文字「せ」と記載されているとしたとき、これを即座に「せ」と読めるかと云うことからでもすぐに確認ができればよい。

さらに現在、考古学によって古代日本人が文字の修練をした木簡類などが多方面から発見され、書いては削り、書いては削りして、文字を磨きだしてきたその証しをここに見ることもできるではあるまいか。この道具である「削刀」も朝鮮半島で出土している。

仏教伝来と書記文字言語

大陸から朝鮮半島を経由して、仏教が日本に伝来した。この仏教も天竺インドを根源とし、中国に伝来したときには、多くの道教支持者たちに迫害されたのである。その迫害の結果が東へ東へと仏教を運ぶ起爆剤であったのであれば、この伝えようとする仏教徒である僧侶にとって、まさに必死であ

ったに違いない。高德の僧侶たちが我が叡智をこの列島に注ぎ込んでこそ、一過性の言語発話には存在し獲ない、めくるめく書記文字言語の威力を感じ取らず精氣をもたらしただのではあるまいか。渡来系の文化知識階層の人たちが時の権力者である「大王」（持統朝以降の「天皇」）のもとに跪くも、安定と保護のもたらす世界にはかあるまい。これとは逆に列島統治の権力者は、己れをはじめとする「大王」とその一族の心の安らぎを神とは別に彼らの伝え来た仏教（ここで云う仏教とは、宗教ではない。いわゆる、高い智徳教養の文化を醸し出す世界である）に求めていったのである。

和語と漢語

ここで彼らが仏教世界として携えてきた漢語と和語とを比較したとき、和語と漢語の比率はどうであらうか。和語一語に対して、①複数の漢語がある。②複数の合成和語と複数の漢語に宛てられる。このことに注目してみよう。 ※混種語は和語の行に置いた。

あさ【朝】	明け。朝明。朝未。未明。鶏鳴。薄明。弘。春。曉。	あさまけ。あさあけ。あさまだき。あかつき。あけぼの。しのめ。あさぼらけ。かわたれどき。ありあけ。
あしたか・い【温・暖】	長閑。陽和。温潤。温和。暖気。	のどか。ようわ。おんじゆん。おんわ。だんき。
あさ【朝】	明け。朝明。朝未。未明。鶏鳴。薄明。弘。春。曉。	あさまけ。あさあけ。あさまだき。あかつき。あけぼの。しのめ。あさぼらけ。かわたれどき。ありあけ。
早暁。	黎明。未明。鶏鳴。薄明。弘。春。曉。	そうぎよう。れいめい。みめい。けいめい。はくめい。ふつぎよう。しゆんぎよう。しゆんぎよう。
ゆう・よる【夕】	入相。黄昏。火点し頃。晩方。宵の口。宵。小夜。	いりあい。たそがれ。ひともし。ごろう。ばんがた。よいのくち。よい。さよ。
薄暮。	晚景。暮夜。初更。三更。深更。夜半。後夜。残夜。	はくぼ。ばんけい。ぼや。しよこう。さんこう。しんこう。やはん。ごや。ざんや。

あつ・い【暑】×

炎暑 炎天 炎熱 激暑 酷暑 酷熱 暑氣 盛暑 残暑 灼熱 焦熱

つめた・い【冷】×

清涼 爽涼 冷涼

さむ・い【寒】

夜寒 底冷え 寒寒 酷寒 極寒 寒天 向寒 春寒 余寒 凜凜 惡寒

あめ【雨】

微雨 地雨 村雨 村時雨 篠突く雨 時雨 氷雨 狐の嫁入り 遣らずの雨 涙雨

かぜ【風】

野分 春一番 風薫る 南風 東風 小夜風 風 空つ風 木枯らし 山背

ゆき【雪】

細雪 斑雪 淡雪 泡雪 朔風 金風 小米雪 牡丹雪 餅雪 深雪 根雪 吹雪 冬化粧 綿帽子

ひかり【光】

朝日影 日脚 日の目 風光る 木漏れ日 暈 星影

おと【音】

遠音 木霊 潮騒 音色 遠鳴り 響動む 家鳴り 爪音 弦音 筒音

おとこ【男】

男一匹 男気 男盛り 男ぶり 男冥利 東男 男衆 殿方 翁 若造 優男

おんな【女】

手弱女 大和撫子 女子衆 色女

まじわ・る【交】

閨秀 才媛 才女 女傑 麗人 佳人 別嬪 烈女 刀自 老女 淫婦 阿魔

こい【恋】

横恋慕 徒情け 火遊び 恋路 色恋 艷事 粹事 見初める ほの字 肌を合わせる

な・く【泣】

泣き濡れる 咽ぶ 啜り泣く 空涙

わら・う【笑】

高笑い 笑壺 爆笑 朗笑 談笑 嬌笑 微笑 失笑 冷笑 嗤笑 嘲笑

いま【今】

今しも 今日日 この節 今時分 今風

むかし【昔】

現時 現下 方今 刻下 即今 当今 当節 時下 現今 当世 今生

むかし【昔】

往古 往年 千古 昔日 既往 旧時 先度 過般 従前

当該語の下の段に収載した漢語群は、大陸中国で用いられていた語群であるが、これらの漢語の読み及びその意味合いが今日の中国語と合致しているかと云えば、必ずしも同じとは言い切れない。そこには大陸中国の政治社会に何等かの異和感を懐き、日本に渡来・亡命した人たちと原日本人とが新たな書記文字としての漢語の営みを初めていてもおかしくはないからだ。実際に、漢文体と目には

映る漢語の文字群が日本式漢文体（「漢式和文」）としてここに生み出されてきていることで確かめられる。

こうした「漢式和文」が平安時代以降の仏典受容のなかで多様な文章形態を作り上げていく。この過程を考察することも日本語とその言語文化を習得し、理会していくうえでも重要な課題となろう。そして、この変遷過程が近代日本人の体内に沈殿し、その教養意識や自他認識の基層をなし得ていると考えられるからでもある。この近代に継続接合している「知育」の制度自体が漢文訓読の成立に直接依拠しているともいえる。中世から近世、すなわち、江戸時代の国学・朱子学・古文修辞学が巻き起こす日本語テキストの問題に絡めて見る必要があるからなのである。たとえば、中国古典『文選』を訓読する独特の作法「文選読み」や日本の軍記物語である『太平記』を訓読する近世初期の「太平記読み」（根源は、「中世唱導説教」の一系統の経典講釈・法門講談など）という実に奇怪な書物の訓読方法が独自のなかにも考案されてきているからである。

また、文学のなかには、仏教説話という形式で東アジア各国に共通する説話内容を秘めた作品群が存在していることも見逃せない。日本の院政時代に成立した『**今昔物語集**』（国宝鈴鹿本が京都大学

* 「文選読み」は、『大唐三蔵玄奘法師表啓』（857-859、877-883）に「歡喜とよろこびよろこぶること。『海道記』（1232年成）に「商賣のあき人」。『童蒙頌韻』には「ひがしのかぜ東風と吹きてこをりとけ凍融と」などが知られる。
* 「太平記読み」は、戦国大名のお伽集であった赤松法印を元祖とし、主家を離れた武士が軍書の講釈をして仕官の途を求めている中に大道芸人化し、人々に受け入れられたという。江戸元禄以降には「講釈場」や「辻講釈」が行われ、やがて寄席藝能へと発展を遂げる。

附屬図書館に現存する）は、その代表的作品とも言える。その意味で、仏典資料が及ぼした伝播の過程は大きい。その説話の一つに、「二鼠譬喩」譚が知られていて、日本においては歌語「月の鼠」として、白黒二足のネズミを日月の時間にたとえて、人間の生死、無常を説いた寓話となっている。

また、時代降って南北朝時代の軍記物語『太平記』卷第三十三・新田左兵衛佐義興自害事に、
情是を譬ふれば、無常の虎に追れて煩惱の大河を渡れば、三毒の大蛇浮出て是を呑んと舌を暢べ、其餐害を通んと岸の額なる草の根に命を係て取付たれば、**黒白二の月の鼠**が其草の根をかぶるなる、無常の喩へに不異。

というのがそれである。お隣り韓国では、高麗時代の釋迦伝記である『釋迦如来行蹟頌』にこれと同じ譚が見えているということが近年の研究報告でなされている。これは佛教とともにこの説話がアジア全体に広がり、欧州ヨーロッパでは「キリシタン聖者伝」に盛り込まれているといった途方もない広がりを持った話譚となっているのである。この一つの説話の拡がりを考えるときに、宗教とは必ずしも切り離せないものであるが、説話の有する揺るぎない根底力を私たちは再確認せねばなるまい。

☆ 月の鼠 月日が過ぎゆくこと。類…● 月日の鼠 説話…「賓頭盧説法経」 仏教で、人が象に追われて、木の根を伝わって井戸の中に隠れたところ、井戸の周囲には四匹の毒蛇がいてその人を噛もうとし、また、木の根を黒

・白二匹の鼠が齧ろうとしていたという話。象を無常、鼠を昼と夜、毒蛇を地・水・火・風の四大に喩えた。

出典…賓頭盧説法経 賓頭盧突羅闍爲優陀延王説法経。求那跋陀羅……詳細は、目下調査中。賓頭盧は釈迦の弟子で、十六羅漢の第一の人。

そして、最後に、今現代の日本人が表現する「世界」と云うことばそのものが、仏教語であることを皆さんはご存じでしたか？

《ことばの実際》

上記に示した基本語〔和語・漢語〕「あさ【朝】」「ゆう・よる【夕】」「あたたか・い【温・暖】」「あつ・い【暑】」「つめた・い【冷】」「さむ・い【寒】」「あめ【雨】」「かぜ【風】」「ゆき【雪】」「ひかり【光】」「おとこ【男】」「おんな【女】」「まじわ・る【交】」「こい【恋】」「な・く【泣】」「わら・う【笑】」「いま【今】」「むかし【昔】」のなかから基本語「おと【音】」について、古典及び近現代の文学作品に見られる各々の語における用例文を次に記載入力してみる。

おと【音】

〔和語〕

遠音（とおね） 煤煙（一九〇九）〈森田草平〉二一「洋琴の**遠音**が空気に波状を起して二階へ伝はった」

木霊（こだま） 雪国（一九三五〜四七）〈川端康成〉「高い響きのまま夜の雪から**木魂**して来さうだった」

潮騒（しほさい） 海潮音（一九〇五）〈上田敏訳〉人と海「心もともに、はためきて、**潮騒**高く湧くならむ」

※小説。三島由紀夫作。昭和二年（一九五四）刊。伊勢湾の小島を舞台にした牧歌的な恋愛小説。様々な障害をのりこえ結ばれる島の海女の息子新治と船主の娘初江の物語。

音色（ねいろ） 三四郎（一九〇八）〈夏目漱石〉三「初対面の女には見出す事の出来ない安らかな**音色**があった」

遠鳴り（とおなり） 恋衣（一九〇五）曙染（与謝野晶子）「海恋し潮の**遠鳴り**かぞへては少女となりし父母の**家**」

響動（びょうどう） 金色夜叉（一八九七〜九八）〈尾崎紅葉〉前・一「奥の方なる**響動**の劇しきに紛れて取合

はんともせざりければ」

家鳴り（やなり） 浮世草子・西鶴織留（一六九四）一・三「なんの事もない座敷を、**家鳴**がするといひ出

し」**爪音**（つまおと） 浄瑠璃・伽羅先代萩（一七八五）六「いつまでも、かはらぬ御代に、相竹の、代々は幾千

代、八千代ふる、千代を寿く、**爪音**は、鎌倉山に美を尽す、冠者太郎義綱公の奥御殿」

弦音（つるおと） 天草本平家（一五九二）二・八「*guruvolonu*（ツルヲトヲ） サンド チャウチャウド

シテ」

筒音（つつおと） 武蔵野（一八九八）〈国木田独步〉三「隣の林でだしぬけに起る**銃音**」

〔漢語〕

風声（ふうせい） 東京新繁昌記（一八七四〜七六）〈服部誠一〉三・増上寺「君秘する勿れ。**風声**はよりも

疾く、早く已に他の耳に伝ふ」

濤声（とうせい） 不如帰（一八九八〜九九）〈徳富蘆花〉中・四「怒り哮る相模灘の**濤声**」

余韻（よゐん） 雪国（一九三五〜四七）〈川端康成〉「そして後には、車輪の音よりも葉子の声の**余韻**が残

つてゐさうだった」

残響（ざんきやう） エオンタ（一九六八）〈金井美恵子〉一二「虚ろな音の**残響**が壁や床に沈澱しているよう

なのだ」

吹鳴。^{すいめい} 正法眼蔵（二二三一〜五三二）恁麼「風鳴なり、鈴鳴なり、吹鳴なり、鳴鳴なりともいふべし」
轟音。^{ごうおん} 鉄路に近く（二九五六）（島尾敏雄）「それはきつと電車のヘッドライトで、やがて轟音を
あたりにまきちらしてこちらに突進してくる」

「課題」この記載入力の方法に従って、是非、残りの上記の基本語から一つを選択して、ご自身で調べ願いたい。この用例は、小学館『日本国語大辞典』第二版によって入力収載したものである。